

特集

パブリックアウトリーチ

今回の特集について

編集部

今回と次号ではパブリックアウトリーチについて、特集記事を組みました。“パブリックアウトリーチ”という聞き慣れない言葉に付いては、矢治さんの説明をご覧ください。

さて、以下の特集記事を読んでいただければわかるように、アウトリーチ「する側」があれば、もちろん「される側」もあります。それは、天文とは無関係な一般の人たちであったり、これから天文を学ぶ学生・生徒・児童、そして私たちのように天文教育に携わる人たちであったりとさまざまですが、それぞれに「見合った」アウトリーチをするのはとても大変です。しかしそれがされないと、せっかくの情報も生きてきません。

また、アウトリーチの手段も重要です。今回特集したパブリックアウトリーチ活動についての記事は、2001年12月にかわべ天文公園で開かれた、天文情報処理研究会での発表のいくつかに加え、代表的な機関の活動をプラスしたものです。どれも大変興味深い内容ではありますが、みなさんはその内容をどれだけ具体的に知っており、また実際に活用されていたでしょうか？

ここで問題となるアウトリーチ「する側」と「される側」の食い違いは、双方がコミュニケーションをとって、お互いの状況や要望を理解していくことによって改善できるでしょう。しかし、今まではこのコミュニケーションさえもほとんどされてきませんでした。その結果、お互いの状況は理解されることなく、双方には高い壁が立ちだかっただけ、といった印象

も受けます。

今回は、実際のアウトリーチ活動の紹介と、そのアウトリーチ活動に期待すること・提案したいこと・そしてみなさん自身にも考えていただきたいことなどを、学校教育、社会教育の立場から挙げてみました。もちろん後者は、ごく一部の考えでしかありませんので、これをもとにみなさんのご意見や具体的な提案などをお聞かせいただき、また議論できればと考えています。いただいたご意見は、今回「アウトリーチする側」として、原稿を書いていた執筆者、機関に届ける予定です。みなさんの積極的な投稿をお待ちしております。



図1 かわべ天文公園での研究会の様子